相楽 聡美の誕生パーティ殺人事件！

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
相楽　聡美の誕生パーティ殺人事件！

【Ｎコード】
Ｎ０６０５Ｅ

【作者名】
桂　ヒナギク

【あらすじ】
とあるお屋敷で起こった殺人事件。果たして、主人公は事件を解決出来るのか？

最初の殺人（前書き）

えっと、読者の皆様には黙っていたのですが、天海　沙月さんのＤｅｔｅｃｔｉｖｅ　ｃａｔよりクロとシロを出す事が決定しました。この企画は既に天海さんにはお伝えして承諾して頂いております故、著作権については全く問題はありません。と言う訳で――

第一回、黒猫＆聡美の殺人事件

始まります。

最初の殺人

私の名は相楽（さがら）　聡美。都内の有名進学校に通う普通の女子高生で・・・あったのだが、ひょんな事から有名人となってしまった。
それは、私が友人の誕生パーティに招待された時の事だ。

＊

都内にある、皇居とも思える程大きなお屋敷。そこは、私の友人でもある、名門西園寺財閥（コンツェルン）社長の御曹子（おんぞうし）、西園寺（さいおんじ）　小春が暮らすご自宅である。
私は今日、彼女の誕生パーティに招待され、彼氏の桐山（きりやま）　秀次とそのお屋敷にお邪魔していた。
今居るのは、学校の体育館より広いパーティ会場。彼の有名な童話の主人公、灰かぶり姫が訪れた城の舞踏会会場よりも広いそこには、豪勢な料理が沢山用意されている。そしてそれを取り巻く様に、大勢の人々。その数、数千人。流石、財閥の令嬢だ。
「聡美ー！」
とそこに私の名を大声で呼びながらやって来る一人の少女。縦髪ウェーブで円らな瞳。白いドレスを着ているその娘が、西園寺　小春である。
「ハッピバースデイ小春」
私はそう言って小春を抱き締めた。
「苦しい」
「ああ、ごめん」
私は小春を締めていた腕を緩めた。
「聡美、今日は来てくれて有り難う。・・・あら、そっちの子は？」

小春が私の後ろに居た少年に気付きそう訊ねる。
「桐山　秀次よ。私のげぼっ、じゃなかった。彼氏よ」
「聡美、今言い掛けたよな？下僕って」
「むせただけよ」
私は秀次に向いてそう言った後、小春に「ねえ？」と顔を向けた。頷いて下さい――そう念じながら。
すると、小春は私の表情から思いを読み取ったのか、三回ほど頷いてくれた。
「ほんとかよ・・・？それより、料理食べねえか？」
「全く、あんたは食いしん坊なんだから」
「あら、良いのよ？好きなだけ食べて」
「マジ？」
「その為の料理よ」
「じゃあお言葉に甘えて」
私はそう言うと、秀次と共に料理を食べに動いた。
「秀次、何処から食べる？」
「聡美さん、まぁさか全部平らげると仰るつもりじゃありませんよねぇ？」
秀次は少し嫌味な顔でそう言った。
「そのつもりよ。だって、小春が好きなだけ食べて良いって言ってたのよ？そう言う事だから、あんたも私を手伝いなさい」
私がそう答えると彼は「無理だ。お前の食欲には敵わない」と即答した。
私はその言葉にハハッと笑いながら食事に有り付く。うん、どれもこれも全部美味だ。
そして私は数分で食料を全部胃袋に収めた。辺りの者は全員、私の事を見て口をポカーンと開けている。
「聡美、ホントに食べたわね」と小春が言った。
「うん。どれもこれも皆、美味しかったよ」
私がそう言うと、小さな少女が声を掛けて来た。

「ちょっと」
振り返ると、ウェーブの掛かった長い黒髪の娘が私を見上げていた。
私はその少女に「何か？」と訊ねる。
少女は私にハスキーボイスで「料理」と呟いた。
「ああ、ごめん。全部食べちゃった」
「・・・・・・」
少女は無言を回答に、ショックで肩を竦める。
そこへ、少女と同じくらいの歳の男の子がやって来てた。
「僕のあげるから落ち込まないでよ、クロ」
男の子はそう言って料理が盛られた自分のお皿を少女に渡した。
「有り難う、シロ」
少女はそう言うと、小春に会釈して男の子と共に去って行った。
「誰？」
私は小春に訊ねた。すると小春はこう言う。
「聡美、知らないの？あの女の子は今、世間で話題噴騰中の名探偵よ。名を氷鉋（ひがの）　黒羽。通称、黒猫。新聞でも有名なんだから」
「へぇ。でも何でそんな人が？」
「私が呼んだのよ」
「なして？」
その問いに小春は懐から＜西園寺　様＞と書かれた封筒を取り出した。
「何それ？」
すると小春が私に耳を貸すように手招きするので、私は小春の口元に耳を近付けた。そして、驚く様な事を囁く。それは――
「脅迫状」
「え？」
「脅迫状よ、きょ・う・は・く・じょ・う。今日開いたパーティでね、私のパパを殺すって書かれてたの。しかも届いたのが４月１日だったから、信じなかったんだけど、そしたら次の日に電話が掛か

って来たのよ。出たのはママなんだけど、相手はこう言ったわ。社長の命は貰った。今度の娘の誕生パーティの日に社長を殺す、って・・・。だから、あの娘に依頼したのよ。この手紙を送った人物を見付けて欲しいって」

「それ・・・本当なの？」

と、その時だった。

きゃあああああ！――と言う甲高い悲鳴が屋敷中に響いた。

「行ってみる？」

私は小春にそう訊ねた。

小春は小さく頷き、駆け出した。その後ろを、私が追う。

会場を飛び出し、左右に分かれた廊下を右に曲がってひたすら真っ直ぐ行き、突き当たりにある＜応接室＞と書かれた扉の前にやって来た。

中には腰を抜かして震えているメイド服の女性が一人居た。

「どうしたの？」

小春が訊ねると、メイドの女性は震える手で指を差した。

その先には、鼻の下に髭を生やした４０代後半と思しき男が、ソファに座りながら机に伏して、口から血を吐いている姿が在った。

机の上には、倒れたコップに零れた黒い液体が確認出来る。恐らく、毒入りコーヒーか何かだろう。

私は伏している男に近付き、呼吸と脈拍を確認して首を振るった。左右に。

小春は言葉を失い、床に膝を着いた。そこへ、先程の少女、氷鉋黒羽と男の子が現れる。

「何かあったんですか？」と氷鉋　黒羽。

私は氷鉋　黒羽に男が死んでいる事を話した。

氷鉋　黒羽は遺体を凝視すると言った。

「シロ、警察に電話。メイドさんと西園寺さん、それとお姉さんは部屋から出て」

お姉さん、と言うのは私の事らしい。

私は氷鉋　黒羽に睨みを利かせた。
この娘とは何か勝負しなくてはいけない気がする。
そう思った私は、もう一度遺体に触れ・・・ようとした。
「触らないで」
氷鉋　黒羽が私を睨み付けながら言った。
「下手に触ったら死亡推定時刻が崩れる恐れが・・・」
彼女がそこまで言った所で、私は遺体に触れ、腕時計を確認した。
現在、午後８時半。
「およそ１時間って所ね。口からアーモンド臭がする。死因はＫＣＮよ」
「ＫＣＮ？青酸カリじゃ」
「ＫＣＮはシアン化カリウム、又は青酸カリの化学式よ。経口最低致死量は推定２００ｍｇ。知らなかったのかしら、名探偵さん？」
言って私は不適に微笑んでみせた後、小春に近付いて言った。
「戻って皆のアリバイを聴くわ」
するとメイドが横から口を挟んできた。
「あの、旦那様は自殺じゃないかと思います」
「自殺？どうしてですか」
「実は、私が此処に来た時、ドアには鍵が掛かってたんです」
と言う事は密室。待てよ？でもそれじゃ、メイドさんはどうやって。
「あの、鍵はどうやって？」
「合い鍵です」
「成る程」
私はもう一度部屋に入り、隅々を調べた。
ドアの鍵には怪しいものは一つも無い。窓も、人が一人通れそうだが、しっかり鍵が掛かっている。他殺と仮定し、犯人は一体どうやって密室を作ったと言うのだろうか・・・。

最初の殺人（後書き）

天海さん、読んだ？劇中で聡美がクロに「知らなかった？」と発言したけど、天海さんはＫＣＮ知ってます・・・？
それはさておき、本題に入りますが、今回、この作品では、クロとシロのラブコメ率を上げたいと思います。また、ラブコメお約束の読者サービスもあります。
え、駄目！？否、あたしはやりますよ。例え天海さんが僕を嫌おうとも。ほなな～

――ネタバレ――

初回は無いですよ？だって最初ですしね。次話辺りからって事で

大丈夫か、この刑事？

あれから、短時間で警察が到着し、現場検証が行われた。
「警視庁捜査一課の日奈菊（ひなぎく）　明日香よ。お話し伺わせて貰うわ」
そう言って、ピンク色の長い髪の女性が懐から警察手帳を出して第一発見者であるメイドに見せる。それには＜警部補＞と書かれている。
「先ずお名前を教えて下さるかしら？」
その問いに、メイドが口を開く。
「榊原（さかきばら）　真理愛と申します」
「では榊原さん、ご遺体を発見された時の状況を詳しく説明して下さい」
「えーと・・・旦那様を発見した時、書斎には鍵が掛かっていました」
「鍵ですか。書斎にはどんな御用で？」
「食事の準備が出来たので旦那様をお呼びに。けど、お返事が無かったので、変だなと思って開けようとしたら、鍵が掛かっており、合い鍵で開けて中を確認しました」
「そして遺体を発見した、間違いありませんね？」
はい――と頷くメイドの真理愛。
「では、発見した時、変わった事とかありませんでしたか？」
「いえ、特に」
「そうですか。此処へ来る途中、怪しい人物とかは？」
「待って下さい。旦那様は自殺です」
「え、どう言う事？」
「だって、部屋は施錠されてましたし・・・」
「はあ？あのね、鍵が掛かってたからって、自殺とは限らないのよ。犯人が殺害した後、外から鍵を使って閉めたと考える事も出来るから」

日奈菊警部補がそう言うと、氷鉋　黒羽が否定する。
「それは無理ですよ、警部補。何故なら、被害者のズボンのポケットに書斎の鍵が入ってましたから」
と日奈菊警部補の下に氷鉋　黒羽が鍵を持って来る。
「誰よ、君？」
その問いに眉を顰（ひそ）める氷鉋　黒羽。
「氷鉋　黒羽、探偵です」
「え、君があの有名な？とてもそんな風には見えないわね」
日奈菊警部補は氷鉋　黒羽を蔑（さげす）む様な目で言った。
私はそんな刑事さんに一言。
「子ども相手に大人気無いですよ、刑事さん」
そう言う私も、大人気無い。
「あんた誰？」
日奈菊警部補が振り向き、私にそう訊ねる。
その足元で、氷鉋　黒羽がズボンの裾を引っ張る。
「ウザイわね！何なのよ！？」
日奈菊警部補は氷鉋　黒羽を見下ろして怒鳴りつけた。
私はその警部補を細い目で見る。
「何よその目？」
それに気付いた日奈菊警部補は私に向き直った。
「何で怒ってんですか、刑事さん？」
「別に怒ってなんかないわよ！」
「いやいや、怒ってますよね絶対。てか、それ証拠品になるんで受理した方が・・・」
「解ってるわよ！」
日奈菊警部補はそう言うと、氷鉋　黒羽から鍵を奪い取った。
「で、あなた誰？」
「相楽　聡美です」
「被害者の知り合い？」
「いえ、知らない人です」

「何しに来たの？」
「友達の誕生パーティに招待されたから来たんですが？」
言って私は招待状を取り出して見せた。
「ふーん」
日奈菊警部補は素っ気無い態度で返すと、氷鉋　黒羽の方を見た。
「君は何しに来たの？」
「私はあの方に依頼されて」
と小春を指差す氷鉋　黒羽。
日奈菊警部補は小春を見ると、近付いて訊ねた。
「君、名前は？」
「西園寺　小春です」
「そう。依頼ってどう言う事？」
「えっと、それは父の事です。先日、何者かから手紙が届いたんです」
小春はそう言うと例の予告状を取り出した。
日奈菊警部補はそれを奪い取るようにして、封筒から一枚の紙を取り出した。
「何よこれ！？殺人予告じゃない！あなた、これ警察には相談したの！？」
「したわ。でも、真面目に取り合ってくれなかった。エイプリルフールの悪戯だって言われてね」
「あ、そ。まあ兎に角、この件は殺人事件として捜査をするわ。と言う訳で、事情聴取をしようと思うんだけど・・・」
「数千人を相手にですか。頑張って下さいね？」
私はそう茶化す様に言った。
「ちょっ、数千人！？」
「ええ、パーティ会場に」
そうよね？――と小春を見る私。
小春は無言で頷いて見せると、日奈菊警部補に「こちらです」と言ってパーティ会場へ案内した。

「ちょっ、ホントにこんなに居んの！？」
遠くから、日奈菊警部補の感嘆の声が聞こえた。
「どうでも良いけど眠い」
私はそう言って欠伸を掻きながら腕時計を確認した。現在、午後１０時を回っている。
「あの、でしたらお部屋をご用意致しますわ。今日はもう遅いですし、お泊まりになられては如何かと」
真理愛はそう言った後、私の後ろに居た氷鉋　黒羽と男の子に「あなた方もどうです？」と付け加える。
「それじゃあ、お言葉に甘えて」
と男の子が言う。
そう言えば、この子の名前訊いてないわね。
私は男の子の方を向いて訊ねた。
「ぼく、名前は？」
「立森（たちもり）　志狼です。シロって呼んで下さい」
「解ったわ、シロちゃん」
「シロちゃん？」と目を点にする立森　志狼ことシロちゃん。その傍らで、氷鉋　黒羽がプッと吹いた。
「ちょっと、クロ」
「ほう。黒猫さんはクロと呼ばれてんのか。じゃあクロちゃんだね」
「なっ！？」
傍らでシロちゃんを笑っていた氷鉋　黒羽ことクロちゃんが一瞬で固まった。すると、今後はシロちゃんがプッと吹き出す。
「可愛いニックネームだね」
「シロだって可愛いわよ！」
面白い奴らだ――そう思いながら私は二人を見てクスクス笑う。
「えっと、それじゃあ真理愛さん。お部屋、案内してくれますか？」
「畏（かしこ）まりました」
真理愛はそう言うと、私たちをそれぞれ寝室へと案内した。
二階の２０５号室。そこが、私の泊まる部屋である。

「って、一寸待った！まさかとは思わないけど、もしかしてこの屋敷ホテル兼ねてる！？」
「はい、兼ねてますわ」
真理愛はそう言うとニッコリと微笑んだ。
「マジ？道理で屋敷の入り口にフロントがある訳だわ」
「毎度有り難う御座います」
そちらの方も――とクロちゃんらの方を見る真理愛。
「取り消し利かないですか？」
「無理ですわ」
「・・・・・・」
私は無言を回答に肩を竦めた。
「そんなに気を落とさないで下さい。お安くしておきますから」
「お安くって、本来は幾らなの？」
「禁則事項ですわ」
「・・・・・・」
私は言葉を失い、そのまま部屋へと入り、ベッドに飛び込んだ。
同時に、携帯が呼び出しをする。
私は直ぐさま取り出して応答した。
「聡美か。何処に居るんだ？」
そう訊ねるのは秀次だ。
「あんたね、私の携帯に掛けて私以外の人が出るかしら？そんな事より、二階の五号室で待ってるわ。大至急来て」
「二階の五号室？何だか分からないけど、直ぐに行くよ」
秀次はそう言うと電話を切り、およそ五分後に私の下に現れた。
「言われた通り来たけど」
「有り難う。私、此処に泊まる事になったから」
「ふうん。それだけか？」
「うん、それだけ」
「あ、そ。じゃあな」
そう言って部屋を出て行こうとするアホ毛が飛び出た少年、秀次。

私は立ち上がり秀次の項(うなじ)を掴んで引き留めた。
「何だよ？」
「あんたも泊まって行くのよ？」
「嫌だ」
「私とじゃ不服？」
「そんな事は言ってない」
「じゃあ私と一緒に宿泊よ」
「嫌だ」
「しゅ・く・は・く！」
私は秀次の顔をこちらに向けて睨み付けた。すると秀次は涙を流して「喜んで！」と答えた。
「ちょっ、嬉しいからって泣く事無いでしょ？」
「別に嬉しいから泣いてるんじゃねえよ！お前と一緒に寝るのを避けられない事に悲しんでるんだ！」
ピキッ！
私は額に青筋を立てた。
「桐山くん、それどう言う意味かしら？」
引き攣り笑みで訊ねる私。
「え、何か言ったか俺？」
ガスン！
私は秀次の顔面を思いっ切り殴った。
「ちょっ、何で殴るんだよ！？」
私は秀次の胸倉を掴んで怒鳴りつけてやる。
「ムカついたからに決まってんでしょうが！！」
「えっと、どの辺がムカついたのかな？」
「もう良いわ！秀次のバカ！」
私はそう言うと秀次を突き放してベッドに横になった。
「わ、悪かったよ聡美。実は冗談なんだ。本当は、お前と一緒に寝れて嬉しい」
私は秀次を細い目でジーッと見て答える。

「ホントにそう思ってる？」
「ああ、思ってる思ってる」
そう言って添い寝しようとする秀次。私はそれを制止して股間を蹴り付けた。
「うっ！」
股間を押さえて蹲（うずくま）る。
「あんたは床よ」
「何でだよ！？俺だってベッドで寝てえっつーの！」
「・・・解ったわよ」
私は嫌々承諾をすると、半分程スペースを空けた。
「サンキュウ」
言って隣に横になる秀次。
「ちょっとあんた、汗臭いわよ。風呂入ったの？」
「入ってない」
「何日？」
「二日」
「不潔！」
ドン！
私は秀次をベッドから蹴り落とした。
デーンッと音を立てて床に叩き付けられる彼。
「やっぱあんた床で寝なさい。側に居られたら臭くて堪らないし腐るから」
「腐らねえよ！」
「そうね、腐らないわ。けど、臭いの嫌」
そう言って私は掛け布団を被って眠りに入ろうとするが・・・。

大丈夫か、この刑事？（後書き）

えっと、何かジャンルが推理からラブコメになって来てる気がするが気にしない。

――ネタバレ――

皆さん、もうご存知かも知れないが、日奈菊　明日香はハ〇テのごとく！の生徒会長兼剣道部部長さんが元ネタです。

さて、次話は・・・いつになるか不明です。

予定外

「真理愛さん、お風呂借りても良いですか？」
志狼はメイドの真理愛にそう訊いた。
「ええ、構いませんわ。こっちです」
真理愛はそう言うと、志狼を脱衣所へと案内した。
「今、タオル持って来ますね」
真理愛は志狼を残し、脱衣所から出ていった。
それにしても、この脱衣所は広い。何処かの温泉に来ているみたいだ。
志狼はそう思った。するとそこへ、真理愛がタオルとバスタオル、浴衣を持ってやってきた。
「浴衣とバスタオル、ここに置いておきますから、上がったら使って下さいね」
それじゃ――そう言い残し、浴衣とバスタオルを棚に置かれた黄色い籠に納め、タオルを志狼に渡して立ち去・・・ろうとしたが、何か思いだし、慌てて振り返った。しかし、志狼は既に浴場に入っていた。
「あ、どうしましょう。中には女の子が」
そう言った瞬間、中からハスキーボイスな悲鳴が聞こえてきた。
真理愛は慌てて開け、中の様子を確認した。目の前で、黒羽の裸を見てしまって固まっている志狼。
真理愛は「あらまぁ」と頬を赤らめた。
「シロのエッチ！」
言って黒羽は志狼を突き飛ばそうとするが、しかし、足を滑らせて彼を押し倒してその上に。
カーッと赤くなる志狼と黒羽。

＊

「眠れない」
眠いのに寝付けない私は起き上がった。床には秀次が鼾を掻いて眠っている。
可哀想な事したかしら？――そう思った私は、ベッドを降りて臭いを我慢し、彼をベッドに移して掛け布団を掛けてやると、部屋を静かに出た。
廊下は既に電気が消されており、ほぼ闇。私は懐中電灯を取り出して前方を照らして歩き出す。向かったのは、応接室。
ドアをそっと開けると、軋む音を発した。
中に入り、ドアを閉めて電気を点けて懐中電灯を仕舞う。
直後、閉めた筈のドアが開け放たれた。
誰？――と振り向くと、そこには黒猫さんが居た。
「誰かと思えばチビ探偵か。あんたも密室の謎を解きに北野　武？」
「その通りよ。て言うか、そのギャグつまらない」
「あ、そ。まあ良いわ」
私はそう言って、部屋を調べ始めた。すると、黒羽も調べ始める。
「それより黒ノ助、言っとくけどあんたの出る幕は無いわ。私が先に解くからね」
「私に推理勝負を挑むなんて良い度胸ね」
私たちは互いに向かい合い、バチバチと火花を散らす。
「それと、私の名前は黒羽よ」
「赤羽？」
「クロ！」
「態とよ。そのぐらい解ってるわ」
「・・・・・・」
無言で眉を顰める黒羽。
私はそんな彼女を放置して作業に戻る。しかし、めぼしい物は何一つ見付からない。やはり、警察が持ち出してしまったのだろうか。

「あ、解った」
黒羽が突然そう口にした。私は振り向き訊ねる。
「何が解ったの？」
「密室のトリック」
「ホントに？是非聴きたいわね」
「外から閉めたのよ」
「誰がどうやって？」
「榊原さんが合い鍵で」
「根拠は？」
「証言よ。あの人、自殺に見せたがってた」
「それ違うんじゃない？」
「否、絶対そう」
「じゃあ夜が明けたら、真理愛さんに訊いてみる？犯行時刻に何処に居たか。まあ、仮に犯人だったら嘘言うだろうけど」
その言葉に黒羽は「解った」と頷き、部屋を出ていった。
直後、私も電気を消して部屋を出て寝間へと戻り、ベッドに潜り込んだ。

＊

お屋敷一階の使用人用寝室。そこでは、メイドの真理愛が何者かと話していた。
「貴方なんですよね？旦那様を殺害なさったのは」
何者かは、真理愛の言葉に眉間を顰めた。
「私、実は見てたんですよ。台所で貴方が旦那様のコーヒーに透明な液体をお入れになった所。あれ、青酸カリですよね？」
「・・・警察に言うつもりか？」
「勿論ですわ。犯罪に手を染めた者をこのまま野放しになんて出来

ませんも」
「そうか・・・。なら生かしてはおけないな」
何者かはそう言うと、素早く動いて真理愛を押し倒し、そして首を絞める。
呼吸を止められ、息苦しそうに藻掻く真理愛。
やがて、真理愛は意識を失い、ピクリとも動かなくなった。
何者かは真理愛の脈拍を計り、脈が無い事を確認すると、「死んだか」と口にした。
（流石にこのままにしておくのは拙いか）
そう思った何者かは、辺りを見回し、棚の上に丁度良い長さのロープを見付けると、真理愛の体と一緒にそれを応接室に運び天井に吊した。
何者かはニヤリと北叟笑み、その場を離れた。

予定外（後書き）

メイドの殺害は犯人とって予定外のもの。
これで、犯人を知る者は一人も居なくなった訳だが・・・。
て事で、次回に続くんだお。

――ネタバレ――
皆さん、お気づきだと思いますが、メイドさんの名前の由来は前回と同じく「ハ〇テのごとく！」です。

まさかあいつが？

「きゃあああああ！」
突然の悲鳴に、私は目を覚ました。
悲鳴の発生元は、昨日、事件の遭った応接室である。
私は咄嗟に部屋を飛び出し、応接室に向かった。そこには、腰を抜かして座り込んでいる小春の姿がある。
「小春、何か遭ったの？」
「ま、真理ちゃんが・・・」
小春は震える手で、部屋の中を指差す。
私は部屋に顔を向け、目に映る光景に驚愕した。真理愛が首を吊って死んでいる。
「小春、警察呼んで」
「うん、解った」
小春は頷くと、慌てて去っていった。
私は部屋に入り、真理愛の足元に在った紙を拾った。それにはこう書かれている。
『皆様、申し訳ありません。旦那様は私が殺害しました。殺害の動機は子どもです。実を言うと、私のお腹の中には旦那様の子どもが居ました。私はその事を旦那様に告げたのですが、全く相手にして貰えませんでした。だから私は、ついカッとなって・・・。お嬢様、ごめんなさい。そしてさようなら』
読み終えた私は、吊されている真理愛に触れた。
まだ弱冠温かい。３０．５度くらいか。となると、彼女が健康な状態ならば通常体温は推定３６．５度。人の体温は一時間に１度下がるから、死後六時間って所か。因みに現在の時刻は午前８時。真理愛さんは午前２時には既に亡くなっていたと思われる。
「お姉さん、何してるの？」
いきなり背後から声を掛けられ、ビクッとする私。振り向くと、

そこには黒羽が居た。
「何だ、クロちゃんか。吃驚(びっくり)させんな」
「ごめん。それより、お姉さんが殺ったの？」
「ばっ！私が殺る訳無いでしょ！？」
そう怒鳴り付けると、私は黒羽に遺書を見せた。
「やっぱり榊原さんが犯人だったのね」
「否、それは否定するわ」
「どうして？」
「遺体を見て頂戴。遺体は机の真上に吊されてるから、一見自殺に見えるけど、よく見ると爪先から机まで結構あるのよ。正確な長さは不明だけど、大体１ｍくらいはあるわね。と言う事は、この高さで自殺するには、足場が必要なのよ。なのに、この部屋には足場になる様な物は一切見当たらない。つまり、自殺は不可能。他殺って事よ」
「正解よ」
「え？」
「貴方の力量を計らせて貰ったわ。対した洞察力ね」
その言葉に私は額にピキッと青筋を立てる。
「あんた解ってて態と？」
「うん」
「此処が屋上だったら突き落としてるわ」
「怖いこと言わないで。それより、早く降ろしてあげないと可哀想よ」
「言われなくてもそのつもりよ」
私は机に乗り、ロープを解いて遺体を降ろした。そこへ丁度、警察が到着する。
「ちょっとあんた、何してんのよ！？」
日奈菊警部補は入ってくるなり、いきなり私を怒鳴った。
「何って、仏さんが可哀想だから降ろしてあげたんですよ」
「勝手に降ろすな！そう言うのは我々警察がやるわ！」

「すみません。て言うか何で怒ってらっしゃるのです？」
「別に怒ってなんかいないわよ！そんな事より出てった！」
「はいはい」
私は嫌々部屋を出た。
「そこのちっちゃいのも！」
その言葉に黒羽が眉間を顰める。
「刑事さん、そんなにプリプリしてると頭の血管切れますよ？」
「うっさいわね！誰の所為よ！？」
やれやれ。もう無視しよう。
「クロ、此処は警察に任せて私たちは屋敷の住人に話しを聞きに行きましょ」
私はそう言うと、黒羽を連れてその場を離れ・・・ようとした。
「聡美」と小春がやって来る。
「小春、丁度良い所に来たわ」
「何？」
私は首を傾げる小春に直球を投げる。
「真理愛さんが妊娠してたって本当？」
「え、どう言う事？」
「何だ。小春は知らないのか」
「ごめん。あ、でも執事の鷹文なら知ってるかも」
「その鷹文って人、今は何処に？」
私が訊ねると、黒いスーツを着た私と同じ背丈の男が現れた。
「僕が鷹文ですけど、何か用ですか？」
私はその男の顔を見て頬を赤らめ、意識を奪われそうになったが、慌てて我を取り戻した。
「あ、あの、話しがあるんです。真理愛さんの事についてなんですが」
「真理愛さんについて、ですか」
「そう。鷹文さんは、真理愛さんが病院に通院されていた事ご存知ですか？」

「いえ、知りません。真理愛さん、産婦人科に通われてたんですか？」
「・・・・・・」
私は無言を回答に執事を見詰める。
やべえこの人。滅茶苦茶イケメンだわ。あんな汗臭い男捨ててこの人に乗り換えようかしら。
「あの、どうかなさいましたか？」
執事の鷹文は首を傾げ訊ねる。
「鷹文さん、現在お付き合いしてる方は！？」
バカ！私ったら何訊いてのよ！？
「すみません。そうじゃなくて、どうして産婦人科である事をご存知なんです？私は病院としか言ってませんが」
私がそう訊くと、鷹文はしまったと言う顔をした。
「ご存知なんですね？妊娠の事」
「・・・はい、知ってます」
「では、真理愛さんのお腹の中に居るのが小春の腹違いの弟か妹だってのもご存知ですか？」
「聡美、それどう言う事？」
「これ見れば解るわ」
言って私は小春に遺書を渡した。
「鷹文さん、ご存知なんですか？」
「ええ、知ってます。この前、真理愛さんから聞いた時はとても吃驚しました。僕たちは未だやってもいないのに子どもが出来るのかって。でも違った。子どもは旦那様のでした」
「鷹文さん、真理愛さんとはコレだったんですか？」
私は小指を突き立てて見せる。
「そうです」
「では小春のお父さんを殺す動機、十分にありますね」
「一寸待って下さい！あなた、僕を疑ってんですか！？」
「だってそうでしょ！？真理愛さんが妊娠させられて、貴方は相当

恨んでる筈よ！」
「た、確かに僕は旦那様を恨んでましたけど、殺してなんかいませんよ！それに、殺害の動機なら奥様にもあります！」
「奥様って小春のお母さん？」
「そうです。連れて来ましょうか？」
「お願いします」
私がそう言うと、鷹文はダッシュで去り、女性を抱き抱えてダッシュで戻って来た。
「お嬢様のお母様です」
女性は頭を下げた。
「初めまして。小春の母の春子です」
「春子さん、小春のお父さんの事聴かせて下さい」
私が言うと、春子は顔を顰めた。
「あんな男の話しなんてしたくないわ」
「あんな男？」
「あんな男はあんな男よ。昨日、警察にも話したけど、あの男、私が居るのにあんな女と不倫してたのよ！？」
「あんな女？」
「あの女よ！メイドの榊原　真理愛！」
私は春子を訝しむ。
「春子さん、貴方にも動機がありますよね。旦那さんを殺害する」
「はっ！私は殺してないわよ！」
春子はそう言うと、バカバカしいと口にして去っていった。
「・・・・・・」
間違いない。あの二人の内のどちらかが犯人。しかし、証拠が無い。どうしたものか・・・。
私がそう考え事をしていると、背後から髪の毛を強く引っ張られた。
「ちょっとあんた、勝手な真似しないで頂戴！」
と私を睨みながら怒鳴りつける日奈菊警部補。

「ちょっ、痛いから放して下さい！」
私の言葉に、日奈菊警部補は嫌々髪の毛を放した。
「まあ良いわ。で、あんた何訊いたの？」
「亡くなった真理愛さんの妊娠について」
「妊娠？」
これです――と小春が日奈菊警部補に遺書を渡す。
「何よこれ？」
日奈菊警部補は渡された遺書を読んで頷く。
「成る程。仏さんは自殺なの」
「ちょっ、あんたどんだけ洞察力低いのよ！それでも刑事！？」
「はあ？じゃあ貴方はこれを他殺だって言う訳？」
私は「はあ」と溜め息を吐いて肩を竦める。
「他殺の理由は、現場の状況を見れば一目瞭然。と言っても、遺体は私が降ろしちゃったから解らないけど、私が部屋に来た時、遺体の側に足場となる物は無かったわ」
「そんなの後で片付ければ良いんじゃないの？」
「・・・あのね、自殺した人間がどうやって足場を片付けるって言うの？」
「それもそうね。でも、だからって他殺・・・」
そこまで言い掛けた所で、黒羽が遮る様に言った。
「痕」
「へ？」
「首に手で絞められた様な痕があったわ」
「それじゃあ真理愛さんは別の場所で殺されて此処に運ばれたって事？」
「そう言う事」
私は小春に向き訊ねる。
「小春、真理愛さんの部屋を教えて」
「真理ちゃんの部屋なら反対側にあるよ」
小春はそう言って応接室とは反対側の方向を指差した。その先に、

ドアが小さく見える。
「あそこが真理ちゃんの部屋よ」
「有り難う」
言って私はそこへ向かって歩き出す。
途中、秀次が現れて声を掛けてきた。
「聡美、何してんだ？」
「あ、汗男」
「うぉい！？」
「気に入らない？」
「当然だろ！」
「あ、そ。て言うか、真理愛さんが亡くなったわ」
「え、真理愛さん殺されたの？」
「そう。で、今殺害現場に行く所」
そう言った瞬間、私は気が付く。
秀次は何故、真理愛が殺された事を？
まさか――そう思った私は悟られない様に気を付ける事にした。
「えっと、じゃあ私、もう行くわ」
そう言い残し、通路を駆けて真理愛の部屋に飛び込む。

＊

黒羽は部屋で志狼と二人きりになっていた。
先程から何かを考えている黒羽。
「クロ」
唐突に志狼が声を放った。
「先刻、トイレ借りた時にこんなのを見付けたんだけど」
言って志狼はポケットからテグスを取り出した。
「この釣糸、何処で？」

「洗面所のゴミ箱。密室のトリックに使えないかなって思って」
「それ貸して！」
黒羽は半ば強引に奪取してそれを見詰める。
「シロ、解ったわ。密室のトリック。そして真犯人も」

まさかあいつが？（後書き）

真理愛も殺害されてしまいました。
そして謎が解けたと言うクロ。
次回、クロの推理お披露目です。

写真の二人

真理愛の部屋に入ると、私は隅々を調べ始めた。
ベッド、箪笥（タンス）、押し入れ等、妙な物は無い。
「ん？」
コ〇ヨの勉強机の上にある写真立てが倒れているのに気付いた私はそれを取り上げた。それには真理愛と秀次の姿が写った写真が収まっていた。
後で秀次に訊くとしよう――そう思った私は写真立てから写真を抜き取ってポケットに仕舞った。
直後、小春が部屋に入ってきた。
「聡美、氷鉋さんの推理ショーが始まるから応接室に来てくれない？」
「え、もう解ったの？あの娘」
「うん」
「解った、行く。けどその前に一つ良いかな？」
「何？」
「真理愛さんって弟居た？」
その問いに小春は若干上を向いて答える。
「確か・・・生き別れになった弟が居るって聞いた事があるけど、それがどうかしたの？」
「否、何でも無い。それじゃあ行こう」
そう言って足を動かすと、側にあったゴミ箱に足を引っ掛けて倒した。
「何やってんのよ、聡美のドジッ娘」
私はしゃがんでゴミ箱を戻した。その時、中にテグスが入っている事に気付いた。
密室のトリックに使えるかも――そう思った私はそれを取り仕舞って立ち上がった。

「何、今の？」
「釣り糸。多分、密室を作る時に使われたんだと思う」
「へえ。まあ良いや。兎に角行こう」
私は「うん」と頷き、小春と共に応接室に向かった。

応接室に着くと、黒羽の推理ショーは既に始まっていた。
観客は執事の鷹文、警視庁捜査一課の日奈菊警部補、秀次、志狼の四人である。さて、実力の方、拝見させて貰うとしますか。
「これから、第一の事件の時の状況を再現したいと思います」
黒羽は徐にテグスを取り出した。
「警部補、被害者役をやって頂けますか？」
「何で私がやらなきゃいけないのよ？」
私はやれやれと言う表情で挙手した。
「クロ、日奈菊警部補はその役嫌いみたいだから私がやってあげるわ」
「じゃあお願いするわ」
そこに座って――と最初の被害者が座っていた席を指差す黒羽。
私は言われた通り、その席に座って次の指示を待つ。
「発見された時のポーズになって」
私は机に伏した。
「で、何すんの？」
「そのままじっとしてて」
「了解」
そう返事すると、黒羽が近付いて来て針を取り出し、テグスを穴に通し、私のズボンのポケットに刺す。そして、鍵を通し、片端を鍵に結び付け入り口まで伸ばし、外に出てドアを閉めて鍵を掛け、ドアと床に出来た隙間からテグスを引っ張って鍵を室内に入れ、ポケットまで運び、テグスを思いっ切り引っ張って結び目を解き回収した。

「シロ、開けて」
志狼が解錠してドアを開けた。同時に黒羽が入ってくる。
「犯人は恐らく、今の方法で密室を作りあげた」
「成る程。で、肝心の犯人は？」と日奈菊警部補。
黒羽は徐に、「犯人は・・・」と指を差した。それは――

写真の二人（後書き）

いよいよ物語もクライマックス。黒羽は犯人を指を差した。果たして聡美は手柄を立てる事が出来るのか？

推理ミス

「執事の鷹文さん、あなたです！」
その言葉にその場に居た人物が、全員驚いて鷹文の方を向いた。
「ちょっ、待って下さいよ！何で僕が！？」
「鷹文さん、あなたは榊原さんと交際していて、尚且つ彼女のお腹に被害者の子どもが居る事を知っていました。ご主人を殺害するに至って十分な動機ですよね」
「確かに、僕も最初、主人に殺意を抱いた。けど、殺害なんてしてない！それに、君もあの娘と一緒に聴いてたじゃないか！奥様にも殺害の動機があるって！」
鷹文はそう怒鳴って私を指差す。
「確かに、動機なら春子さんにもありますけど、この犯行は貴方にしか出来ないんです。先刻、小春さんから聴いたけど、貴方釣りをやってますよね。と言う事は、テグスを持っていても可笑しくない」
そう言って先程使ったテグスを取り出す黒羽。
「これは先程、シロが洗面所のゴミ箱で見付けてくれた物よ。これ、貴方のですよね。鷹文さん」
その言葉に彼は眉を顰める。
「じゃあ、真理愛さんを殺したのは？」
その問いに黒羽は、
「それも貴方。恐らく、貴方はキッチンでコーヒーに毒を仕込む所を彼女に目撃されてしまった。だから、貴方は彼女を口封じの為、絞殺した」
満面の笑みでそう答える。
鷹文は床に手を着いた。
「ちょっと待って」
私はそう言って席を立ち上がった。
同時に鍵がポトリと落ちる。

「え？」
黒羽が目を点にして鍵を見詰める。
「貴方の推理には穴があるわ」
「穴？」と私を見る黒羽。
私は徐に鍵を拾って答える。
「この鍵、ちゃんとポケットに入ってなかったわよね。何故か解る？」
解らない――と首を傾げる黒羽。
「座ってたからよ。その為、ズボンのポケットの口が締まり、鍵が入らなくなった。その状態でテグスを引っ張って結び目を解いたものだから、立った時に落ちたのよ」
それと――と私はテグスを取り出す。
「テグスなら真理愛さんの部屋のゴミ箱にも在ったわ。これは恐らく、真犯人が予め仕掛けておいた罠。家中を捜せば至る所に出て来ると思うわ」
「し、真犯人ですって！？」と驚く日奈菊警部補。
「そう、真犯人。そしてその人物は彼よ！」
私はそう言いながらビシッと格好良く秀次を指差した。
「ちょ、一寸待てよ聡美。俺は被害者とは面識が無いんだぜ？なのにどうして俺が殺さなきゃいけないんだよ？」
「それは、あんたが真理愛さんの実弟（おとうと）だから」
「え・・・っ？」
秀次の顔が強張る。
「この写真がそれを物語ってるわ」
そう言って私は真理愛の部屋で見付けた例の写真を取り出す。
「此処に写ってるの、あんたと真理愛さんよね」
「そ、そこに写ってるからって、俺がメイドさんの弟だとは限らんだろ？」
「確かにそうね。けど小春が言ってたわ。真理愛さんには生き別れになった弟が居るって」

私はそう言うと小春の方を向いた。
「小春、真理愛さんの弟の名前は？」
「えっと確か・・・秀次って名前だわ」
私は秀次に向き直る。
「ああ、そうだよ。俺とあの人は姉弟(してい)だ。だが、この家の主人は殺しちゃいない」
「否、殺したわ」
「証拠はあるのか？俺が殺したと言う物的な」
「それを出す前に、先に密室のトリックを明かそうかしら」

推理ミス（後書き）

衝撃的展開。まさか彼が犯人だとは俺も思わなかったよ。（え？てな訳で、次回は密室のトリックを暴きましょう。

真相は……（前書き）

お待たせしました。漸く更新です。では

真相は……

「見ての通り、この部屋の窓は、このように開きます」
そう言って私は、窓を開ける為に、それに近付いて摘みを上げて開錠した。
「これが今回の事件の重要なポイントです」
ポイント？――と疑問符を浮かべる日奈菊警部補。「さて、先ずご主人の件ですが、先程のトリックでは密室を作るのは不可能です。ではどうやって行ったのか」
私は小春に向いて訊ねた。
「この家にドライアイスはあるかしら？」
「ええ、あるわ」
「じゃあ、それを小さく砕いて持ってきて。あとゴム手袋も」
「解った」
小春は頷くと、部屋を出て何処からかドライアイスとゴム手袋を調達して戻ってきた。
私は先ずゴム手袋を受け取り、手に填めると、小さく砕かれたドライアイスを窓枠にある鍵穴に落とした。
「犯人は外側から今の動作を行いました。これで、密室のトリックは完了。あとはドライアイスが溶けて勝手に施錠されるのを待つのみ」
黒羽は「……成程。見逃していたわ」と口にした。
「それで、彼が犯人だと言う物的証拠は？」
日奈菊警部補が秀次を差しながら訊ねた。
「そんな物、私は持って――」
そこまで言った所で、私は秀次が口にしていた事を思い出した。
「そう言えば秀次、どうして真理愛さんが殺された事を知ってたの？」
「それはお前が言ったからじゃん。殺されたって」

私は首を左右に振るった。
「私は殺されたなんて言ってないわ。亡くなった、となら口にしたけどね」
「……！？」
秀次は焦って冷や汗を垂らす。
「貴方、ひょっとして」
「……ああ、そうだよ。お前の言う通り、この家の主人を殺したのは俺だ。そしてメイド……いや、真理愛姉さんも」
「姉を殺したのは口封じかしら？」
「ああ、そうさ。姉さん、俺が毒を盛った所見てたんだ。しかもそれを知らない振りして、あいつに毒入りコーヒー飲ませてた」
「……！？」
初耳だ。
「それって共犯じゃない！」と日奈菊警部補。
「だけど……姉さん、俺に言ったんだ。自首しろって。俺、それがどうしても許せなくてよ。自分で飲ませといて何が自首だよ！？」
秀次は膝を着くと、涙を流した。
「聡美……」
「うん？」
「俺、死刑確定か？」
「警部補、どうでしょう？」
「大丈夫。殺人とその幇助の罪で裁かれる事になるけど、裁判次第では死刑にはならないわ」
警部補は行きましょうかと、秀次を連れていく。
「あ、そうだ。俺が戻ってくるまで、待っててくれないか？」
秀次は振り返って私を見るとそう言った。
「……嫌だ」
「えっ……？」
「刑事さん、そいつを早く連れてって」
「解ったわ」

警部補はそう答えると、暴れる秀次を押さえて連れ去った。
「聡美、あんな見送り方で良いの？」
小春が不思議そうな顔で訊ねた。
「良いのよ。殺人犯の彼女だ、なんてレッテル貼られたくないしね」
私はそう言って、部屋を後にした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0605e/

相楽 聡美の誕生パーティ殺人事件！

2010年10月10日05時42分発行